

「千葉氏を語る」

「だより」

第四回総会開催される

平成三〇年度総会は去る六月二日午後一時より千葉市中央区の「ぎぼーる」大会議室で行われました。司会者から「会員総数六一名、本人出席二八名委任状による出席者一九名計四七名で総数の過半数に達していますので、本総会は規約第八条により成立しました」と報告があり、続いて丸井副会長より、開会宣言をし、その後向後会長より「今年は、千葉常胤誕生九〇〇年に当たり千葉市が第二回目の千葉サミットを開催し、各関係団体も多数参加され、八年後の千葉開府九〇〇年祭に向けてこの運動を活発化し、千葉市の発展と振興に向け活動しています。本会も協力して地域の発展に努めたいと思います」と言う挨拶がありました。続いて、小川智之市会議員、萩原博千葉日報社長、鈴木雅一千葉氏顕彰会事務局長各氏の祝辞を戴きました。

平成30年度
第6号
発行・編集
千葉氏を語る会事務局
発行日
平成30年7月20日

その後司会者より、会員の山内博を議長に選出して議事に入る。先ず山内議長より報告議案として第一号平成二九年度事業報告、第二号平成二九年度収支決算報告を議題とすることとし、日向事務局長から資料により説明する。次に第三号平成二九年度監査報告を監事江波戸弘安より「私監事は、千葉氏を語る会の平成二九年度の収支決算書は記載すべき事項を正しく示しており、諸帳簿及び諸帳票の記帳整理も適切に記載されており、指摘する事項は認められません」との報告があり、議長より「以上報告議案三件を一括して質問、ご意見等が御座いましたら挙手をして発言して下さい」議場より異議なしの声あり「それではこの三件の報告議案についての承認に賛成の方は拍手をお願いします。」議場から拍手が多

数あり賛成多数と認め報告議案三件は原案通り承認されました。次に議長より協議議案として第一号平成三〇年度事業計画、第二号平成三〇年度収支予算案を議題とすることとし、再び日向事務局長より資料に基づいて説明がありました。議長より「この二件の案件について質問、ご意見等がありましたら挙手をして発言して下さい」と議長にはかり、議長より異議なしの声あり、議長は異議なしと認め議案は可決され成立しました。次に第三号議案「役員選出について」を議題とし、日向事務局長より「今年は役員改選ではありませんが資料のとおり役員三名の辞任によりその補充が必要であります。適任者が見つからず、会計幹事の交代のみです。」と説明しました。議長はこれを議場に諮り全員異議無くこれを議決決定する。以上で全ての本総会提出議案は承認、または可決成立しましたので、議長は総会の終了を宣言しました。

以上

続いて記念講演会に入り最初に千葉市長より次の様なメッセージを戴きました。

千葉市長熊谷俊人様ご挨拶

今日は、千葉常胤の生誕900年を記念して、講演会が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。
一族中興の祖といわれる千葉常胤の生誕900年にあたり、このような記念講演会が開催され、多くの皆様にとって千葉の歴史に親しんでいただける機会が得られますことは、誠に喜ばしく、また意義深いものと存じます。
開催にご尽力された皆様へ心から敬意を表しますとともに、会のますますのご発展と、ご参集の皆様のご活躍、ご健勝を心からお祈りいたします。

平成30年6月2日 千葉市長 熊谷 俊人

千葉介常胤の生涯（序）

顧問 段 木 一 行

中世初期の豪族千葉介常胤は突然歴史の舞台に現れたわけではなく、舞台に立つ前の準備期間がある。常胤を日本歴史の中で正しく理解するためには、平安時代末期に成長した彼を取り巻く歴史的環境から語る必要がある。手初めに次の二点に絞って考えてみたい。

一、富豪の輩と大名田堵

中世的世界の出現はある面で西日本対東日本の対決と見る方法もあり、撰関（公家）と侍（武士）の対決ともいえる。日本の歴史はヨーロッパの歴史推移と共通する点は多いが全く同じではない。また中国を中心とする東アジアの歴史とも異なる点が多く見られる。特に中世的世界の成り立ちには、日本特有の色彩が強い。しかし、世界史の中で日本史を正しく理解することは重要である。日本の歴史を西日本と東日本の対立として考える研究者が多い。確かに歴史の転換期では顕著に見られるところである。古代史の中で政変がある度に畿内と東国の境界

に設置されていた三関（鈴鹿・不破・愛発）に急遽「固関使」なるものが配置される。畿内と東国の分断が目的であった。関所を押さえる事が東国を掌握することであり、絶対に有利な立場に立つと考えられていたらしい。当時の東国は不気味な存在であった。その東国で将門の乱が生じた。この反乱は新しい階級である武士の胎動である。当初は同族内の所領争いから、やがて国家への反逆へと質的に変化していった。将門自身は貴族に属し、結果的には京都のミニチュア版に終わった。それは将門と同質の藤原秀郷と平貞盛によつて討伐された事情がよく物語っている。古代専制政治の内部崩壊をもたらしたことは、重要な歴史の変革とみることができる。ここで富豪の輩について事例を紹介する。昌泰二年（八九九）九月十九日の太政官符として「類聚三代格」に「応相模国足柄坂・上野国碓氷坂置関勘過事」がある。之は上野国で近頃強盗が頻繁に発生して通行人を侵害して甚だしい。馬を使つて通行人から物質や命を強奪する馬賊である当時東国が乱れている事で現地の豪族（後の武士）が東山道で略

奪して東海道へ逃げると言うように徒党を組んだ凶賊である。公地公民制度の崩壊にさいして地域豪族が自分達の利益権利を守るため悪党となつていった。

次に「今昔物語」に記されている「利仁將軍時從京敦賀將行五位語第一七」と言う話である。昔利仁將軍という人が若い時藤原基経という人に仕えていた頃越前国の豪族で有仁と言う者の聲になつて、或年の正月大飯会があり基経一行に五位の位の人が居た、有仁はご馳走として「山芋粥」を振るまつたが、その五位の人は「このような旨い物は食べたことがない」と絶賛した。有仁は早速、「明朝までに山芋を持参するよう」と命じた。村人は各人山芋を持参して己刻までには屋根の軒まで高く積み上げられた。このように地域の豪族は莫大な力量があると言う話である。

三番目に大名田堵については出羽権介田中豊益という者は近隣数戸の戸主であるが耕作のために常に干ばつや水害のことを考え、鋤、鋤、鋤を用意し馬を肥やし堰を構築し、畔道を整え農夫を養い、種蒔き、苗代等を指導して地域の繁栄に努めた。

之が田堵といわれる者で、地域の調庸の主体になつてゐる。

次に「更級日記」から一つ例を考えよう。更級日記には「しもつさの国に、まのしてらという人住みけり、ひき布を千むら、万むらおらせ、漂させけるが、家のあととて、深き河を舟にて渡る、昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、河の中に四つたてり、・・・とあり、このあたりには、まのの長者という人が多くの人手を使いひき布（結城紬か）を千むら、万むら織らせて曝して手工業経営していた。このように物を生産し、販売する経営者が之も一人の豪族である。

二、私営田領主

千葉介常胤は東国屈指の豪族で、中世的世界創立の代表的立役者である。両総地方が彼の根拠地であった。かれは下総国相馬郡の郡司であり下総国の有力な在庁官人でもあった。古代においては勸農権・水利権は国家権限に属していたが、律令制度の根幹である公地公民制の矛盾が顕著になり、私有権の拡大が増大した。在地においてその国家権を掌握したのが私営田領主である。伝統的な地方豪族層は郡司として、

古代政治機構の末端組織に組み入れられていた。そこに中央から国司として赴任した中下級貴族たちは、任期終了後にそのまま土着した。

「貴種」と呼ばれていた彼らは、伝統的的地方豪族と婚姻関係を結ぶなどの形で同化し、開発地に命を懸ける「二所懸命」の私営田領主へと変質し、武士と呼ばれる新しい階級を構成した。彼らは開発地を莊園などの形式を通して「不入権」即ち国権力を拒否することが出来るように京都の公家、貴族と手を結び之を手に入れ、保護と権利を確立している。ここで東国の郡司像として武蔵国入間郡の郡司大伴部直赤男を例示した。また、東国における大規模開発の例として、勅旨田設置の実例をあげた。

常胤の父経(常)重は大治五年(一一三〇)に所領地である相馬郡布施郷を伊勢神宮に寄進し在地権力者として下司職を確立した。常胤一三歳の年であった。その下司職は常胤一六歳の時に譲渡された。その後常胤一九歳の時経重は官物未進の科で捕らえられた。長子胤正が誕生(二四歳)。やがて出会うことになり源頼朝の父である義朝による相

馬御厨を押領されるという事件と次男師常の誕生(二六歳)。そして常胤二九歳の時父経重の未進分を納入した。などを経て、常胤は改めて相馬郡を伊勢神宮に寄進している。かくて常胤は着々と基盤を固めながら「二所懸命」の前半生を生き、老境に入り、還暦を過ぎた六三歳になった治承四年(一一八〇)の九月に歴史的な行動を開始する。ここで資料に基づき私営田領主について説明すると、最初に「続日本紀」宝龜八年(七七七)六月五日の条に武蔵国入間郡の人大伴部直赤男は神護景雲三年(七六九)西大寺に布一千五百段(反)、稻七万四千束、墾田四十町、林六十町、を寄進した。しかしこの時既に大伴は死亡していたが従五位下を追贈された。之が私営田領主の例である。次に『類聚国史』の二五九巻と云う文書に三件事例がある。「天長八年(八三一)十月巳卯、下総国空閑地七百餘町、為勅旨田」とあり「淳和天皇、天長六年(八二九)十二月癸酉、武蔵国空閑地百九十町、為西院勅旨田」とあり「同七年(八三〇)二月丙辰、武蔵国空閑地二百一〇町、為勅使田、又正税一万束充開発料」

とあり更に『続日本後記』卷三には「仁明天皇、承和元年(八三四)二月戊戌、武蔵国播羅郡荒廢田百廿三町、奉允冷泉院」とあり同文書には「同八年(八四一)二月己酉、武蔵国田五百七町、奉允嵯峨院」とありいずれも中小豪族が皇族に寄進したものであるこれらが私営田領主に成長するのである。そして最も有力な例として次に樺木文書に大治五年(一一三〇)六月十一日「正六位上行下総国権介平朝臣経繁解申寄進私領老処事」この文書を要約すると下総国相馬郡布施郷を伊勢神宮に寄進するという申出書である。文書には四限として東西南北の地を明記し面積を定め、この地は経繁本人が相伝した私有地である事、伊勢神宮の権禰宜荒木田延明神主に毎年田畠の利上分と土産物鮭等を添えて寄進すること、経繁はこの下司職の権利を子孫に相伝されることを申請しますというのである。之がまさしく下総国権介である経繁が私営田領主であることを主張しているのである。更に樺木文書では久安二年(一一四六)八月十日御厨の下司として正六位平朝臣使常胤が花押の付いた「永付属進先祖伝領

地老処事」と言う文書で在下総国管相馬郡を限東西南北で面積を確定して当郡は平良文朝臣所領の地を子孫代々の名前を掲げ所領したものであると主張し、常重の時代も伊勢神宮の荒木田延明神主に寄進を申し出たこと、保延元年(一一三五)二月に下総国司藤原朝臣親通の在任中に、公田官物未進により保延二年七月十五日常重が逮捕されたこと、その後旬月を経て経胤は未進物を納入したこと等を含めて改めて伊勢神宮に寄進を申請したのである。そして、久安二年(一一四七)四月に相馬郡司に任じられた。このように経胤も又私営田領主としての豪族であったのである。



逆櫓のこと 義経と景時の争論

会員 宮本明正

源頼朝の代官として平家追討に赴いた源義経と頼朝の重臣である梶原景時とが、あと一歩で思いがけない大事件になること寸前の論争です。

千葉氏の祖である高望王を同じ祖とする、平氏一族の家系を伝える、あの古文書(作成年不詳)を見ると、「夫ヨリ、二月三日九郎判官、都ヲ立千西国へ赴キ(中略)摂州・渡部津福島ニテ船掛シテ二月一三日 纜ヲ解キ、出舟セントセシニ、折悪ク西風烈シク吹テ船ニモ少々損シタレバ、是ヲ補修シテ打立ベシト、其ノ日ハ宸ニ泊リタリ。然ルニ大将義経ト梶原景時、逆櫓ノ事ニ付テ大ニ争論ニ及ヒ既ニ陳事ニ及バントス。

時ニ、三浦(平六義村)・畠山(次郎重忠)・土肥(二郎実平)・多々良(五郎義春)等、左右ヲ宥メ一旦和睦スト。是ニ梶原遺恨多々有ラン。手勢を引分ケ、三河守範頼の手ニ属シタリ。

翌一七日ハ北風ト変リ、大風トナリヌレバ、大将義経悦ヒ、風止リタル

時ニ急キ舟ヲ出サレヨト。水主・梶

共申様、是程、大風ニ争ノ船ヲ出サレンヤ。今少シ風弱リ、風聞ヲ見合乗ルベシト言上セシニ、大将義経大ニ怒リ順風ヲ願フ処ナリ、斯ル可急ヲ討ツハ一ノ謀事ナリ。疾ニ船ヲ出サレヨ。辞退セバ、是則、朝敵ナリ。悉く討捨ント仰セレバ、伊勢三郎、太刀抜放シテ下知ヲ伝フ。水主・梶共肝ヲ消シテ船ヲ出シ、海上ニテ兎モ角モ成ラシド纜解テ押出ス。数多ノ舟ノ中ニ、五、六艘乗出ス。」とあります。

『逆櫓の櫓事』が起ったのは元暦二年(一一八五)二月十六日のことで、義経を将として、平家追討のため屋島に向けて出航目前のことです。

激しい春の嵐が吹く中を進もうとする義経に対し、梶原景時は前後進自在の逆櫓を船に取り付けるべきだと主張したが、義経は「逃げ支度か」と一蹴したといえます。しかし、三浦等が仲に入り、大事に至らずに済んだとのこと。その激論の場と伝えられる碑が大阪・JR新福島駅近くにあります。

翌二月一七日未明、止まない大風

の中、義経の船出の命に、水夫も舵取りも肝をつぶして艫綱を解きました。義経は百五〇騎余を従えて、船五艘で摂津・渡部津を出発。三日かかる航程を十八日朝には阿波・桂浦浜(徳島市)に渡り、次いで屋島に向かい、夜を徹して進み、一九日朝八時頃には屋島内裏の対岸に至ります。

一方、景時は怒りが収まらず、配下の兵を二分して、一軍を、源義朝の六男範頼の下に遣りました。(千葉常胤(六八)は、範頼に従っていました)。

その景時は、一四〇艘の船を率いて、二月二二日、ようやく屋島に到着しました。この後、義経軍は、屋島の戦いに勝利し、平家の根拠地・長門を指して進むことになり、三月二四日、壇ノ浦の戦いで平家討滅に至ります。なお、この平家討滅の知らせは、京都へは、義経の使者が四月三日に、鎌倉の頼朝のもとへは、四月一日に飛脚が到着しました。

また、先の逆櫓のことの遺恨か、四月二一日、梶原景時の使者が鎌倉に到着し。「義経が平家追討の功績を自分だけの手柄のように振る舞っている」と報告したそうです。報告ということは、頼朝が義経の監視を命じたのか、景時の讒言なのか分かりませんが、この「逆櫓のこと」の遺恨が頼朝の義経を追討する因の一つになったのかも知れません。

千葉町の歴史散歩

千葉常胤生誕九百年に寄せて

会員 今枝茂雄

今年(一九八〇)は千葉常胤生誕九百年と言うことで、千葉氏サミットなど各種イベントが賑やかに開催されております。千葉市内の頼朝や常胤にまつわる史実・伝承を中心に、千葉の街を歴史散歩してみよう。

①まずは、京成電車千葉中央駅・新宿公園側をスタートします。

中世の頃、この新宿公園〜寒川あたりは『結城野』といい、一一八〇年に常胤の孫成胤が妙見さまのご加護を得て、平家方千田

(藤原) 親正の襲撃を僅かな手勢で破った「結城浜合戦」の地です。②さざなみ橋の手前で左折し、しばらく直線すると『白幡神社』です。石橋山の戦いで敗れて房総に

渡海した頼朝が、常胤らの援軍を得て白幡神社に到着。昔は「結城稲荷」と云われ、頼朝が源氏の白幡を奉納したことから「白幡大明神」とも呼ばれていました。昭和三十一年古墳時代の金銅装飾直刀二振が出土され郷土博物館に保存されています。

③さし石で有名な『神明神社（結城明神）』を通り現在の「君待ち橋」を左に見ながら「大橋」を渡ると『君待橋跡の碑』があります。

ア、一一八〇年九月、常胤一族が出迎えたとき、頼朝が橋の名前を尋ねます。常胤の指示により伊豆ですでに頼朝に拝謁ずみの常胤六男の胤頼が、「見えかくれ八重の潮路を待つ橋や渡りもあえず帰る船人」と答えました。胤頼は歌人で、孫が藤原定家の孫と結婚しています。後に子孫が岐阜の郡上八幡で活躍し、宗祇水、古今伝授の里など、現在女性客で凄い賑わいです。

イ、九九五年に藤原実方が陸奥の国に転勤（左遷）するときここに通り村人に橋の名を問います。「君待橋」と聞いて一句「寒川や

袖師が浦に立つ煙君を待つ橋身にぞ知らるる」と詠みました。

さて、「煙」とは村人の夕食の準備でしょうか。いえいえ、これは富士山の噴煙なのですね。八〇〇年から一一〇〇年頃富士山は十回位噴火しているのです。また、「君を待つ」とは、京都で陸奥に転勤するから一緒に行こうよと誘って断られた清少納言さんと説もあります。

ウ、更に、若い男女が豪雨の時に身を投げた悲しい話もあります。

④次は、JRのガードをくぐって千葉県庁前の『羽衣の松』へ。

千葉（せんよう）の蓮の花に見とれていた天女を妻にした常将。天皇が「千葉」を名乗れと云ったとありますが、某歴史学者の方が、「千葉」を名乗ったのは、一一二六年千葉へやってきた常重（常将の曾孫）のときからだ間違っているかと説。まあ、天女の話ですから・・・

それよりも、当時オーロラを日本で見ることができたので、その美しさが天女伝説に繋がったという説は説得力がありますね。三年前に北海道名寄市でオーロラ

を見られたという新聞記事を持つています。ところで、県庁の前にマキの木（県の木）が並んでいるのを知っていますか、また、県庁の建物十九階には、回廊式展望台（無料）があり、千葉の街を一望できます。

す。明治二十八年建築、設計はリヒャルト・ゼール。八重の桜で有名な同志社大学クラーク館や、霞ヶ関の法務省赤レンガ館の設計者です。

⑤県庁と、県警本部の前の道を少し北に行きましょう。

右側に『鰻安田』の店の看板だけが見えます。木更津から県庁移転に伴って千葉県庁の至近に移

ア、智光院 新義真言宗 一四五六年 千葉康胤開基 七天王塚、お茶

つて来た安田の店も三年ほど前に閉店しましたが、ここに正岡子規が来ていたのです。夏目漱石の房総紀行「木屑録」に感動し、明治二十四年自らも市川、成田から千葉に入り広小路を左折して大

イ、胤重院 浄土宗 一五五八年 常胤三男胤盛の子 胤重のため雲巖上人開山 イボ取り

和橋を渡り鰻を食べているのです。紀行文は「かくれみの」。また、近くの豊田写真館で、あの有名な簗笠姿の写真をとったのですね。あの簗は東京根岸の子規庵に飾ってありましたが、今は倉の中に保管。

ウ、高德寺 曹洞宗 一三六五年 氏胤孫、満胤次男原胤高開基、閻魔堂（六尺座像）は必見

近くに、『千葉教会』があります。天国への憧れ、上に向かっていく垂直方向のデザイン、ゴシック様式の建築を良く表しています

エ、東禅寺 曹洞宗 一三二七年 貞胤開基 かつて七堂伽藍の大寺院 幕末佐倉藩の海防屯所鉄砲的場

(近くの県の文化の森、七天王塚、千葉寺などに行ってみたいですね。)

⑦千葉城(千葉市立郷土博物館)に入ると、三階は、『千葉氏の興亡と妙見信仰』を主題とした歴史展示室になっています。千葉氏を語る会の会報ですから詳細は略しますが、各種絵巻を見るだけでも楽しめます。五階の展望台に上がると、北側に本町小学校の緑の屋根が見えます。昔この辺り一帯は、『池田の池』です。一〇二〇年菅原孝標の娘が父の上総介として任期終了により京に帰国する際、池田の池が大雨で溢れ、三日間足止めされたと『更級日記』に記した場所。何処を通って行ったか、天守から想像するだけでもワクワクしますね。

⑧亥鼻公園には、記念碑や土塁などの遺構があります。大正一五年、千葉開府から八〇〇年後に大きな式典が行われ、月星紋入りの記念碑を建立。亥鼻公園の桜は、この時の植樹で近年老いが目立つ(市民からの寄附を募っています。)

千葉開府八五〇年記念碑の裏面には、千葉氏の歴史に輝く二

十二名が刻まれている。小さな祠の神明社は忠常の世に鎮座。千葉氏の館の内に妙見を祀った場所との説も。

⑨空壕跡の階段を下ると『お茶の水』です。

お茶の水は、千葉氏代々の産湯に使用、常胤が頼朝に茶(水)を献じた、家康が鷹狩りの時に立ち寄った話など枚挙に遑なし。史実としては徳川光圀の甲寅紀行(一六七四年)に、「千葉の町を出る左の方に古い城が有り伊野花という。古城の山の麓に湧水があつて東照宮お茶の水と言ひ伝えてゐる。」とある。黄門さまは大日本史の史料探訪と鎌倉英勝寺への墓参のため、水戸、成田、千葉、浜野、木更津を通り、鋸山(頼朝の上陸地)までの房総紀行文を残しています。頼朝渡海の鋸南町の話となりました。この後、「大和橋・吾妻橋、御不動さん光明寺、蓮池、鞘堂ホール、古東海道の交差点、妙見本宮の千葉神社、町内会所有の常胤像、千葉市の木・ケヤキを見ながら、中央公園から千葉駅前通り」を通って、JR千葉駅に到達です。(大和橋以降は、

機会があれば、またご一緒に散歩しましょう。)

千葉氏の史跡を訪ねる研修会の概要

去る七月二十一・二十二日の両日佐賀県小城市で研修会を行い十八名の参加者が集まった。先ず小城歴史博物館を訪れた。ここは当市の古代から近代に至る歴史の流れが整理され、戦国時代から江戸時代を通じて外様大名の雄として鍋島藩が繁栄した事が強調されている。千葉氏は源平合戦において常胤と六党と言われる息子達が活躍した結果九州で肥前国小城、豊前国上毛、薩摩国島津庄内を所領とし、当初は百年ほど代官統治をしていた。蒙古襲来で幕命により頼胤の時代に現地に下向し、全盛時代が約二〇〇年続いたが、嫡流断絶後、内部の紛争から衰退し、ついに龍造寺氏の傘下を経て鍋島氏に吸収されるまで約五〇年間通算三〇〇年の歴史が整理展示されていた。次に千葉城址、須賀神社(現在は公園に整備されている)を経て円通寺に参詣する。ここは宗胤が天台宗の三箇寺を千葉氏の菩提寺とし再興す

る。寺には佐賀県重要文化財の「持国天、多聞天立像」が湛幸の作と云う。宗胤のお墓もある。次に光勝寺で、胤貞が日蓮信仰の為、一三二七年に建立。胤貞の墓と位牌を参拝。

次に晴気城、肥前千葉氏は東西に分裂していた時、西千葉氏の居城となっていた。次が北浦妙見社、ここは宗胤が妙見信仰のため、妙見像を祀って建立した。次は清水観音宝地院を参拝する。小城は清水の豊富な地有り市内では鯉の養殖が盛んである。次に文化財センターの近くにある宗胤の墓に参拝する。其の次に三岳寺について鎌倉時代天台宗「三津寺」として開山。後鍋島氏が臨済宗「三岳寺」として再興、佐賀県重要文化財として「大日如来像、十一面無観音像、薬師如来像」いずれも湛幸作である。最後に祇園祭について胤貞が一三二六年千葉から小城に来て千葉城を建立。京都八坂神社から牛頭天王の分霊を戴き城内に祀り祇園社を造営、祇園祭は毎年七月第四土、日に大祭が行われるので、この研修会を計画した。胤貞が始めたと言われる大祭は上町、中町、下町から三基の山が出て、九州では博多節田神

社の祇園祭と対比される。二十一日夜の前夜祭、二十二日十時の出陣式を見学し山挽に参加する。千葉氏、龍造寺氏、鍋島氏の時代にも社領の寄進、本殿、拝殿の再建などを支援して現在でもこの伝統は続いている。

会員 監事 江波戸弘安

お知らせ

会報六号をお届けします。会員のご意見、ご感想を高野までお知らせ下さい。

090-3085-7130